

わんりい

159号

2010/12/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



「授業で剪紙を剪る生徒たち」／中国・陝西省延川県(2008年9月11日)

撮影:丹羽朋子

‘わんりい’ 159号の主な目次

北京雑感(50)「北京のサプライズ」	2
私の調べた四字熟語(48)「一諾千金」	3
媛媛讲故事(29)「八仙の伝説区・八仙・海を渡る①」	4
農民画(15)「魚塘」	5
アジアを読む(72)「翻訳と日本の近代」	6
松本杏花さんの俳句集・「千里同風」より	6
フィールドノート⑥ めぐる時間一同じようで違う	7
黄土高原・やぶにらみの旅(三)	10
劉薇・中国コンサートツアーに参加して	12
牡丹江で思う	13
スリランカ紹介(44)「ダンブーラの石窟寺院」	14
アフリカとの出会い(48)「叔父の来日に思う」	15
私の四川省 一人旅(41)「理塘の街で」	16
【活動報告】張紹成さんの「新・気功体操体験講座」	18
第8回留学生トークプラザより「真の幸せとは」	19
‘わんりい’ 掲示板	20

【写真説明】

中国・陝西省延川県の4つの小中学校では、剪紙を美術授業に取り入れる試みが進行中です。剪紙はここ陝北地域で「民間芸術」=非物質文化遺産(無形文化財)としての保護・育成が叫ばれているものの、剪り手の高齢化は進むばかり。母から娘へ家事仕事のひとつとして伝えられてきた剪紙技法は、学校教育で忙しくなった子供たちにとって既におばあちゃんの手仕事となりつつあります。その状況に歯止めをかけるべく始まったのがこのプロジェクト。

お手本を写すようないつもの美術の授業から離れて、思いのままにかたちを繰り出す自由さから、剪紙の時間は子供たちに大人気。国語教師から鞍替えした、剪紙では素人の先生が、剪紙の文様の背景文化を語ることで生徒の想像力をかき立て、魅力的な作品を生み出す手助けをしているのも、この授業の面白いところです。

(説明:丹羽朋子)

最近の尖閣諸島の問題では、中国内陸部の都市で、反日デモが勃発していると、新聞・テレビで報道され、中国在住、或いは旅行中の人々の安全を心配する声がありました。私の友人でも何人か、丁度その頃北京・上海を旅行した人達がおりましたが、様子を訊いてみると、誰もが「内心、心配したけれど、何とも無かった」と答えてくれました。

報道によれば、大規模なものは内陸の都市で発生しているようですから、北京・上海は影響が少なかったとも考えられますが、中国の人々の国民感情としては、沿岸大都市でも少しは影響があるはずでしょうに、旅行者は、殆ど何の変化も感じなかったと言っていました。

以前、私も同じような経験をしました。随分前ですから、もう原因が何だったのか忘れてしまいましたが、北京滞在中に、北京で反日デモが頻発し、大使館が包囲されたり、日系のデパートや日本料理店が投石をされたり、営業妨害を受けたりしたことがありました。新聞やテレビでその様子を見た友人達が、心配してメールで様子を訊ねてくれましたが、私は何も知らずに普段通りの生活をしておりました。私の周りの中国人知人・友人は勿論、近所を出歩いて、町の人たちにも何の変化もありませんでした。一度、繁華街へ出かけた時、バスの窓から日本料理店の入り口が壊されているのを目撃して、マスコミが報道しているようなことが確かにあったのだと、改めて確認したものでした。

外国の状況が報道される時は、往々にしてこのようなことが起こります。決して、報道が間違っているとは申しませんが、少々大袈裟に伝えられることが多いようです。デモや暴動は一大事には違いありませんが、その報道を見ると、その地域の住民が全部同じ思いで行動しているとの誤解を生むような書き方をしているように感じます。デモ発生の状況を詳しく分析して、デモ参加者の気持と共に、デモに批判的な周囲の人々の気持も報道すれば、読者は各自の判断で事態を冷静に見ることが出来るでしょう。読者は、新聞・テレビのセンセーショナルリズムに乗せられないように気をつけなければいけません。

ところで、話が少し飛躍しますけれど、私は、北京に住み始めた頃、初めの印象が全く覆ってしまう経験をして、北京市街の二面性に驚かされた経験があります。初めて北京の街へ放り出された時、いえ、自ら繰り出した時、強い疎外感を感じました。初めはその理由が分からなかったのですが、暫くすると、その理由は街のたたずまいにあると気がつきました。

北京市街中心部の住宅は、単位毎に塀や建物で囲まれています。その囲まれた地域は小区と言っ、日本で言う自治会のような繋がりですが、必ず囲いがあり、出入り口には守衛さんの小屋があり、用も無いのに入るのは憚られます。場所によっては、道の両側に延々と塀が続いていて、ほかに歩いている人がいない時など、日中でも心細く感じます。こんな場所で、急な雨に降られたりすると、ちょっと軒先を借りて雨宿りと言うわけにも行かず、覚悟してぬれて歩くしかないと思いました。

小区の中は、居住楼に囲まれて中庭があり、老人達がおしゃべりをしたり、日向ぼっこをしたりしています。友人が、その人たちに私を紹介してくれると、次回からは必ず声をかけてくれるようになります。一度、冬の寒い日に友人を訪ねたのですが、手違いで友人は買い物に出かけてしまい留守でした。どうしようかと思っていると、お隣のドアが開いて、顔見知りの方が覗き、外は寒いから、部屋に入って待っているようにと誘って下さいました。そこで、その方とも友達になりました。

小区は四方を塀や建物で囲ってあって入りにくいのですが、一度入ってしまうと、ずっと昔からの知り合いのように遇してくれます。これは嬉しい驚きでした。

ある時、古い高層アパートに住む友人を訪ねると、エレベーターホールの床にゴミが溜まり、トイレの臭いが漂って来たりしてビックリしました。しかし、16階にある友人の部屋のドアを開けると、座り心地の良いソファが置かれて広々とした居間が目の前に現れました。玄関ホールの汚さと、この部屋の快適さのギャップに暫し言葉が出ませんでした。

友人が豊かなのは知っていましたが、玄関ホールの印象からは、こんなに快適な住まいがあるとは想像できませんでした。同時に、こんな生活が出来るのなら、あの玄関ホールを何とか出来ないものなのだろうかと思ひ、そんな提案もしない住人達の、家の内外に対する感覚の二面性に驚きました。

しかし、この友人も今では、新しく建った高級マンションに移り住み、家の内外共に快適な生活を送れるようになりました。因みに、新しく建った高級マンションは、真ん中に再生水を利用した噴水やせせらぎを配して、住民のための憩いの広場を造り、回りには洒落たフェンスを設けていますが、出入り口の守衛さんは、人の出入りを従来の小区よりもずっと厳しくチェックしています。多分、以前私が経験したような、友人の顔見知りと友達になるなどと言うことはもう出来ないでしょう。

一 諾 千 金 (いちだくせんぎん) 三澤 統

私が調べた四字熟語 48

あまりお目にかからない言葉なのですが、「一諾千金」という成語があります。この成語についてネット検索を試みたところ、asahi.comの2010年3月17日付記事の中に、米議会によるトヨタ自動車のリコールについての公聴会に関する、次のような一文がありましたので使用例としてご紹介したいと思います。

『コカ・コーラやマクドナルドなどが世界各国の文化に溶け込んだように、世界的企業のトヨタの行動はそのままグローバルスタンダードになる。だから、トヨタはこの公聴会で責任ある企業文化を世界に展^{てんし}翅する機会を与えられたと見るべきである。もちろん「一諾千金」、一度承諾すれば千金に匹敵する重みと信用が高まる。トヨタ

の国際的重責遂行力が問われることは言をまたない』

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲三省堂大辞林

「一諾千金 〈史記 季布伝〉 “得黄金百斤不如得季布一諾” 一度承諾したことは、千金にもかえがたいものであり、必ず守らなければならないの意」

▲小学館中日辞典

「一諾千金 一諾千金 約束は必ず守る。一度引き受けた以上必ずやり遂げる。」

この成語の由来は「史記・季布欒布列伝」の、「得黄金百斤、不如得季布一諾」の部分です。(黄金百斤を得るは、季布の一諾を得るに如かず。)



秦の末、漢の初期のこと、楚の地に任侠をもって知られた季布という人物がおりました。その人物の性質は正直で義理固く、人の面倒を大変良くみました。そして彼は一度承諾した以上は、たとえどんなに困難であっても、あらゆる方法を尽くして、約束した事柄を必ず果たしたのです。楚の項羽と漢の劉邦が戦った時には、季布は項羽の配下の大將として、しばしば劉邦を苦しめました。そのため劉邦が皇帝になった後、季布に莫大な懸賞金をつけて指名手配し、匿った者は一族諸共死刑にすると布告しました。それでも当時の多くの人々は季布を敬い慕っていたので、こっそりと匿ってくれたのでした。

逃亡を続けていた季布は、しばらくは^{ぼくよう}濮陽の町の周家に潜伏していましたが、その後以前世話になり大俠客として



イラスト：叶霖 (yè lín)

名の知れた朱家のところに匿まわれることになりました。朱家では彼を匿まってくれたばかりでなく、劉邦の古い友人でもあり義人として名高い夏侯嬰に季布と劉邦との取り成しを依頼してくれたのです。夏侯嬰の懸命な取り成しにより、遂に劉邦は季布を赦したばかりでなく郎中(官名：警護役)に任じたのです。

ところで、季布と同郷で非常に弁の立つ遊説家の曹丘生という人物が居りました。彼は高位高官の人達との交際を専ら重んじ、そのことを以って自分をひけらかしていましたので季布は平素からそんな彼を軽蔑していました。曹丘は季布が出世したのを聞くと、早速季布に取り入ろうとやって来ました。季布は曹丘を迎えると、厳しい顔をして、彼の面前で苦言を並べ立てましたが曹丘は腰を低くして話を聞いておりました。季布の話聞き終わると、

「実は私は楚の地のいたるところであなた様が一旦約束したことは、どんなことがあっても必ず実行することを評しての『黄金百斤を得るは、季布の一諾を得るに如かず』という言葉が広く伝わっているのを聞いております。私もあなた様をその通りのお方として心より尊敬いたしておりますので、天下を周遊して遊説し、あなた様の名声をますます高めたいと思っていますのです」

と言いました。季布は曹丘がそのように褒めるの聞いてさすがに心中嬉しくなり、曹丘を気に入って数ヶ月留ませ、大切な客として手厚くもてなしました。

曹丘は季布のもとを辞去したあと、方々で大いに季布のことを宣伝したため、季布の名声はますます高くなったということです。

これまでの紹介で、伝説の‘八仙’^注は全部、‘わんりい’に登場しました。さて、八仙が勢ぞろいしたところで、また一つ事件が起こりました。それは中国人なら、老いも若きも、男も女も、誰でも知っている物語「八仙、海を渡る」です。

或る年の3月3日のことです。毎年この日は西王母がすべての仙人を呼んで盛大な宴会を開くならわしになっていました。もちろんこの八仙たちのグループも招待され、彼らは打ち揃って一緒に出掛けて行きました。

西王母の宴会は年にたった一度の楽しい集いなので、皆、思う存分飲んだり、食べたりして賑やかに過ごしました。八仙たちは、宴会が終わってもまだ十分楽しんでいないと感じていました。呂洞賓が、どこか風景の良いところに行こうと提案すると、八仙たちはそれぞれの宝物を持って雲に乗り、東海の辺にやって来ました。

東海は、見渡す限り白い波が次々と打ち寄せては返しており、八仙たちはその雄大な景色に見惚れ、更に気分よく上機嫌でいました。と、突然、海原の遠い彼方にピカピカと光輝く壮麗な宮殿が目に入りました。あれは何だろう、あそこへ遊びに行こうということになりました。

しかし、呂洞賓が言いました。

「この東海地方は東海竜王の縄張りだから、腕の立つ兵士が多い。我々はこの海辺の景色を眺めるだけで十分だ。トラブルになったらまずいだろう？」

鉄拐李は言い返しました。

「東海竜王は悪事をよくやるやつだ。我々が彼を恐れたら世間の笑いものになるだけじゃ！」

呂洞賓は続けて言いました。

「いや、我々にとっては修業が一番大切だ。争いは避けの方が良い！」

しかし、鉄拐李は呂洞賓の話に全く耳を貸そうとはせず、「やあ、わしは東海竜王如きには全く恐れないぞ！では、行くぞ！」と言うなり、自分の杖を波に向って放つと、一隻の小さい船が目の前に現れました。鉄拐李は、船に飛び乗ると海へ漕ぎ出して行きました。

それを見ていた八仙たちは、心配をするものもありませんでしたが、鉄拐李同様に好奇心をそそられ、鉄拐李の後を追いかけることにしました。

鐘離漢は、先ず彼の大きな団扇を水に浮かべその上に乗ると、鉄拐李の後を追って海の上を進んで行きましたし、張果老が驢馬に跨ると、驢馬は海水を素早く掻いて沖に向かって行きました。韓湘子が海辺に立って笛を吹くと海水は左右に分かれて小道が現れ、韓湘子は笛を吹きながら其の道を進んで行きました。

何仙姑の籠には西王母の花園で摘んだ花がいっぱい入っており、其の籠を海水に浮かべて足を入れると、竜宮に



住んでいる竜女達が、花の香りに惹かれ、籠を囲んで沖へ沖へと押し進めて、何仙姑はまるで花の輿に乗っているかのようにでした。

曹国舅も自分の笏を、藍采和も自分の拍子木を海水に浮かべて足を乗せると、まるで平坦な道を進んで行くかのように沖へと進んで行きました。

呂洞賓だけが残りましたが、八仙たちが皆、行ってしまうと、彼も仕方なく、行くしかないと覚悟を決めて背中から剣を下ろして海水に突き刺すと、水面に薄い煙がふわふわと漂い始め、ついには綺麗な雲に纏ると呂洞賓は其の雲に乗って皆を追って行きました。

ところで八仙たちはそれぞれの宝物を駆使して東海を渡って行く途中、海水が高い波となって彼らの宝物に打ち付け、彼らの宝物の美しい輝きが龍宮にまで届きましたので竜王は吃驚しました。

「誰がわしの頭の上を騒がしているのか？ 行って見てこい！」と兵士に偵察させました。まもなく兵士が戻って来、「大変です！呂洞賓たち、八仙がそれぞれの宝物を使って海を進んで来ています」と、報告しました。

「慌てるな。奴らは小技しか使えない。わしの恐ろしさを思い知らせてやろう」と竜王が言い、そして頭を大きく振って体を大きな竜の形に変え、海面に突き出して辺りを眺めると、ちょうど拍子木に乗った藍采和が近くにいるのが目に入りました。

竜王は、「まずこの宝物を私の物にしても悪くないじゃろう」と思い、大きな口を開けて藍采和の拍子木を奪うと嬉しそうに海底に戻って行きました。

(続く)

注) 八仙：李鉄拐、鐘離権(別名・漢鐘離)、張果老、曹国舅、漢湘子、藍采和、何仙姑、呂洞賓

* インターネットに接続できる方は、‘わんりい’ HPの何媛媛さんのページを参照下さい <http://wanli.web.infoseek.co.jp/yuanyuan2/yuanyuan2title.html>



「魚 塘」 曹金英

上海・金山農民画院

この秋、日中友好会館では、舟山諸島（東シナ海）の漁民の皆さんの作品「漁民画」が多数展示されていました。

民間絵画の郷のひとつとして舟山漁民画が画集で紹介されていたのは目にすることがありますが、実際に見ることができたのは初めてで感激でした。荒波の迫力や海を持つ神秘性が、絵の色合いや対象の抽象的な表現によく表れている、のびやかな作品でした。

その土地に暮らす人々の生活の営みは、絵の表現や対象への視点に深く関わるので、ひとくりに民間絵画と言っても、場所によって絵の印象が本当に違います。改めて、いつも目にしている金山や戸県の農民画の中の作者の視点に興味がかかります。

今回ご紹介する絵は、魚つながりですが、海原ではなく生簀いけすです。魚を養殖しているおじさんと娘さん達が魚にえさをあげています。

「今日もみんな元気かな？ 大きく育てね。」
という親心（下心？）が見えるようです。

初めてこの絵を見たときに、魚一匹一匹に躍動感があって楽しい絵だなあと感じました。また、しばらく見ていると、魚のアゴのヒゲとおじさんの鼻の下のヒゲがだぶって見えてきて笑えました。飼犬は飼い主に似ているようなそんな感じでしょうか。

でも作者の曹さんは、この絵をシンプルに濃い青で仕上げたのには理由があるようです。「青花蓮池魚藻」を意識したようです。よく景德鎮の壺の図案などにも見受けられる蓮池を泳ぐ元気な魚は、「魚藻文」と呼ばれる、元から明の時代の青花にしばしば見られたテーマです。

昔から詩歌においても蓮は女性を、魚は男性を比喻するもので、吉慶の象徴でもあります。青と白のオン・オフの中に蓮や藻の、これ以上くずせないほどシンプルな表現がとても映えますね。

魚の跳ねる水の音が聞こえてきそうです。この絵を見たら白鯛焼きが恋しくなった私は無粋者ですね。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

先日、テレビで、日本企業が海外進出する際に、日本の価値観や手法を持ち込んでしまったために、伸び悩んでしまうという事例が出ていた。そのため、企業もようやく現地の人を幹部候補生として雇い始めた。同時に、若い優秀な社員をどんどん外国へ送り出しているという。外国で奮闘する人々は、現地の人と同じ視点になって気が付くことは多いと語る。

まったくの余談だが、以前、海外へ出張する機会があり、赴任中の日本人に、「お世話になったお礼に、日本からなにか送りますよ。リクエストありますか?」と聞いたら、「話し相手…」と本気で言われた。華やかに見える海外赴任も大変なんだなあ、と涙ぐんでしまった、20代の私である。

…話を戻す。本社が日本にあっても、公用語が英語となる会社も出てきた。いずれにせよ、日本の商品の国際競争力が落ちてきているといわれるなかで、企業も必死になっているのだろう。戦いの場は世界なのだから、頭のチャンネルを否が応でも切り替えなければならない。

幕末、攘夷から開国へ転じた日本も、チャンネルの切

り替えを迫られた。もちろん、ショックは比べようもないほど大きかったはず。これまで外国=中国、ポルトガル、朝鮮くらいだったのが、さらにアメリカ・フランス・イギリス…と一気に世界が広がっていく。とりあえず、相手の情報ほしさに、人を留学させ、あらゆる分野の書物を翻訳しまくる。

開国へ転じたきっかけは、武士の国ニッポンが薩英戦争で、コテンパンにやられた危機感だったらしい。漢文に親しんだ経験から、「文明を理解することは歴史を理解すること」という中国儒家の文化的習慣のあった当時の人々は、相手の歴史的背景を知ることから入っていった。漢文を読む習慣がなくなるにつれて、そのような文化的習慣も薄れ、現代主義と実用主義が蔓延してきてしまったと、本書で丸山氏が嘆いている。

つまり、当時の人たちは、ものすごく広い分野の情報を得たうえで、日本の方向性を模索していった。だからこそ、世間知らずだった日本が近代国家の階段を上っていった。現代の私たち、もう一度謙虚に、漢文からみっちり勉強しなおしたほうがいいのかもかもしれない。(真中智子)



松本杏花さんの俳句

「千星同風」より

みずからの唐詩朗詠秋気澄む

zìshēn jīqíng yǒng
自身激情涌

tángshī hànǔ lái lǎngsòng
唐詩汉语来朗诵

qiū yùn tiāndì chéng
秋韵天地澄

赏析；如果说，有好酒好看好友，人的酒量肯定大增，那么，有好景好境好友呢，诗人们肯定会诗兴大作吧。本首俳句记录了作者按捺不住诗情，主动用汉语朗诵了三首唐诗的景况。

虽然着笔不多，但将自身主动朗诵的心情描写的淋漓尽致，颇有日本“私小说”的文脉。

鳥の巢の影逆しまに柳散る

bìchí yǐng niǎo cháo
碧池映鸟巢

qīlì dào yǐng jìliáo dǎo
绮丽倒影寂寥岛

liǔ yè luò xiāoxiǎo
柳叶落萧萧

季语：六夜落，秋。

赏析：此首俳句描写了北京奥运会主场馆——鸟巢的美景，手法奇特，令人叫绝！作者没有为这构造新颖的雄伟建筑作平铺直叙地赞赏，而是通过倒影讴歌她的绚丽。当一枚柳叶飘落在池中轻摇倒影时，那感觉会是如何呢？俳句的威力就是如此让人玩味，让人咀嚼……

時間が、過去～現在～未来へと進んで行くことを、疑う人はいないでしょう。その一方で、時計の針は、今日も、今この瞬間もくるくると同じ軌道上を回り続けています。たった今刻まれて過ぎ去ってしまった7時31分は、明日もまた同じようにめぐってくるだろうこともまた事実であり……

でも、これとは違う「時間」の感覚がある気もするのです——少なくとも、私が暮らした中国・陝北農村の人々には。今月は、4つの「循環」をテーマに、この地域の人々の「時間」感覚について考えていきましょう。



季節の循環——「農民の時間」

私はまだ学生でしたが、日本がバブル景気に沸いていた時代、「世の中はよくなる一方だと思っていた」という回想が、よく聞かれます。この話はおそらく、「でもこれからは逆に下降—辺倒になるのではないか」という不安と表裏一体な気がするのですが、皆さんはどう思われるでしょうか？

いずれにしても、このような感覚は、私たちが通常思い描く「時間」、つまり“単線的”に一方向に進む時間の感覚をなぞるものだと言えるかも——そんなふうに思い始めたのは、先日見た、南仏の農村生活を描いた映画「モダン・ライフ」がきっかけでした。農民たちの日常を淡々と映し出した、この静かな映画に流れていたのは、まぎれもなく“循環的”な時間でした。そして、この「時間」の感覚は、私が暮らした中国・陝北農村のそれによく似ているように思われました。

映画のパンフレットに寄せられた文章のなかで、ある評論家の方が、季節とともに繰り返される伝統的な農村暮らしに根ざしたこの時間を、「農民の時間」と呼んでいました。たしかに、「時間」が断片状に切り刻まれた都会の労働者の時間とは異なりそうだ、ということには賛成です。でも、この見方に少しの違和感を覚えた自分がいたのも事実。なぜかといえば、たぶん、私が感じている「農民の時間」は、とても未来志向だから。もう少し説明すると、彼らがいつも見ているのは、「過去に根ざした未来」であって、単なる繰り返しではないのです。

昨年の初秋、寄宿先のサンワー村を突風が襲ったことがありました。ほんの数時間吹き荒れただけでしたが、不意打ちの暴風の被害は甚大で、あとは赤く熟すのを待つばかりに大きな実をつけた棗の木は、枝ごとものがれて飛ばされ、収穫予定量の5分の1は地面に叩きつけられました。無残に落ちた青い実をひとつひとつ拾い集める村の人々。「一番高く売れる大きな実が落ちた」と人知れず涙を浮かべる長老を手伝いながら、私は言葉を失いました。

翌朝、農家の人々は落ちた実を一齐に各家の中庭に広げはじめました。秋の雨季に入る前のこの時期の天候と陽光の強さを長年の経験からはじき出し、落ちた実を赤く熟させるためにどれくらい陽にあてるべきかを見定めます。ものによっては、貯蔵庫を火で熱してドライフルーツにする作業も並行して行われました。こうして、価値は落ちたとしても少しでも換金できるものに変えることで、被害を最小限に食い止める努力が払われます。農民たちのこの“即興力”は言うまでもなく、日々、年々の変化の観察からのみ得られる、彼らの宝物です。

農曆こそは、このような過去のデータの蓄積そのもの。農曆(旧暦)の10月を過ぎると、陝北農村ではあちこちの大地の穴から、煙が出始めます。この穴はその地面の真下に掘られたヤオトン住宅の煙突の穴で、ここからもくもくと立ちのぼる白い煙の筋は、家の中のかまどに火がくべられる冬の到来を知らせます。(夏は中庭のかまどで調理が行われます。)[十月初一(旧暦の十月一日)以降、かならず寒くなる。この日を過ぎないと、煙は上にのぼっていかず、家の中にもってしまふんだ]そう地元の人がいうのを聞いて初めはちょっと疑った私でしたが、少なくともこの3年間は、そのことば通りになっています。同じく、立春の時期にはきまって暖かな風が吹き出して、歩いて渡れるくらい厚く張った河の氷は融けだし、再び河のせせらぎが響きはじめます。この日には風の神様にご挨拶する儀礼がおこなわれ、それを合図に作物の種を風に飛ばして畑に播く作業が始まり、また新たな農業の一年がスタートするのです。

陝北の人々の日常生活は、学校や企業を除いて、いまでも農曆がスタンダード。(誕生日も、当然、旧暦で祝います。)この地に暮らしていると、他のカレンダーなど考えられないほどに、季節それ自体がこの暦にぴったり寄り添いながら移ろいゆくのを体感し、本当に不思議な気持ちになります。この暦によって設計された暮らしの型こそが、来年の今の自らと作物のあり様を、確実に照らし出してくれるのです。



魂の循環——生と死の繰り返し

「十月初一」といえば、数年前のこの日の夜、北京の大きな交差点脇で、無数の小さな火がぼうっと燃え上がっては消える、幻想的な光景に出くわしたのを思い出します。近づいてみれば、人々が道端にしゃがみこんでチョークでアスファルトに円を描き、その中に弔いたい死者の名を書いて、紙製の服や紙銭を燃やしています。「寒衣」と呼ばれるこの紙製の服は、「鬼」(祖霊や地霊)になったご先祖様に差し入れる冬衣。北京のような大都会では、

お墓参りにいけない人々がこのように即席の陣地を決めて、あの世の故人に「送寒衣」するようですが、陝北ではこの日、かならず土盛りのお墓に寒衣をお供えに行くのが習わしです。

陝北・延川県の剪紙名人、馬瑞蘭さんは毎年「十月初一」の前日と当日、街の橋の上に自作の寒衣を並べて即席のお店を開きます。馬ばあさんの寒衣は、男女用があるだけではなく、下着からチョッキまでセットになっています。上着は表地と裏地に別々の色の紙をつかった上に、金ボタン付きという凝り様！枕も敷・掛布団もあって、小さな剪紙で飾られています。金色に輝く靴もまた、煙草の箱の厚紙をつかって立体に作るという、手の込んだ作りです。

「あつと言う間に燃やしてしまうのに、なんでこんなに丁寧に作るの？」とたずねる私に、馬ばあさんは言います。「私たちが着たり使うものを彼らにもあげないとね。“鬼”だって、下着や布団がないと寒いだろ。きれいな飾りがついているほうがうれしいだろ。」今年の「十月初一」にも、馬さんが丹精込めて作った寒衣はたくさんの墓前に運ばれて、燃やされました。それはこの世で消えたとたんにあの世に届き、きっと冷たい大地に凍えるご先祖様たちを温めていることでしょう。

寒衣が豪華服を模したものであれば、丁寧にドーム型の穴を掘ってつくられる陝北のお墓は、まるでヤオトンのミニチュア版。埋葬時には、土そのままの床がきれいに掃き清められて、ご遺体の傍らに蠟燭を灯したまま、分厚い石のドアが閉められます。こんなふうには、あの世でもこの世と同じような、いやそれよりもよい暮らしを送れるようにと、ご先祖様が葬られて大切に祀られるのをみるにつけ、この土地の人々の魂は、ずっともう一つの世界で生き続けると考えられているのだろうか、感じ入らずにはいられません。

ところが、お年寄りたちの語りには、「生まれ変わり」



馬さん作の女性用の寒衣。右の白い丸首の衣は下着。

の話がよく聞かれるのです。どれくらいの期間で生まれ変わるのかはケースバイケースのようですが、ときにはものすごく短い周期で生まれ変わったというような話もあって驚きます。たとえば、高ばあさんが聞かせてくれた、その昔、病気のお母さんがうわ言で語り出したという前世の話。

高さんのお母さんは前世、山西省の村で男の子の兄弟を生き育てる最中に、若くして亡くなったものの、今も兄弟仲の悪い息子たちが気がかりで、仲直りを諭したい、と切望している……彼女は村の名前や様子も、息子たちの名前も鮮明に語ったそうで、お母さんの高熱がひかず困った家族は、手を尽くして前世の息子たち（すでに高齢になっていたようですが）を探し出して事の次第を説明し、村に連れてきたのだとか。兄弟を見るなり、お母さんは前世の魂となって彼らに語り出し……思いのたけを語り終ると高熱も下がり、元気になったといいます。真偽のほどはともかく、その場ではさも信じられないと笑って話を聞きながしているおじさん達もまた、後日「じつは、うちの父さんも…」とこそそ語り出すのを聞くと、前世話がけっこうポピュラーであることが実感されます。

陝北では、「招魂」という厄除けや病送りの儀礼も日常的に目にします。西洋医学の病院にいて治らなかった病氣、ちょっと具合が悪いときなどは、家族が切り紙や小麦粉を練ってつくった人形を燃やししながら、手箒を振り振り、病人から出て行ってしまった魂を呼び戻します。特に子供たちの魂が出て行ってしまわないようにするのは母親の大切な仕事です。

陝北ではこんなふうには、人の魂が時間と空間、大地の上と下を自由に行き来しながら循環しているかのようです。現世の人も大地に穴を掘った家に暮らすこの地の人々にとって、それは経験的にとても自然なことなのかもしれません。私が研究する剪紙もまた、神々や物語の世界と人々がとても近い場所で生み出される手仕事だと言えます。

私たちの日本のご先祖様もまた、似たような世界観をもっていたらうことは、各地に残るさまざまな風習から見ても確かでしょう。ビルが立ち並ぶ私が住まう現代の“現世”からは、あの世へ旅立つことはひどく遠くに行くことのように感じるのですが、実はそんな見方自体が、長い歴史をさかのぼれば、むしろ特別な見方なのかもしれません。

✂ 世代の循環——老いの心づもり

お棺・死に装束・遺影——この3点セットは、子供たちが親のためにそろえる必須アイテム。亡くなってから準備するのでは間に合わないため、親が60歳を超えたら（最近はまだ少し遅くなってきてはいますが）、息子・娘たちはタイミングをみてこれらの用意に取り掛かります。お棺職人を家に呼び寄せて、立派なお棺を作ってもらうのは、

まさに一家の大事業。木彫りの華麗な装飾をはりめぐらしたお棺は、廃墟となったヤオトンなどに、来たる日まで大切に保管されます。

ご遺体が着る衣装や枕は、「寿衣」や「寿靴」、「寿枕」と呼ばれ、老いてから逝くことができるのを祝うかのように、赤色系の絹布で作られたものをよく目にします。今は既製品を使うことが多いですが、農村では、母のために娘が一針一針と見事な刺繍をほどこした寿衣が、箆笥の中に大切に収められている光景に、今でも時々お目にかかります。以前見せてもらった毛さんお手製の「寿枕」は、この世から蓮の花咲くあの世へ続く階段を登るお母さんと、その足元を照らす何本もの蝋燭が刺繍された、心温まる美しい図案で飾られていました。

村の人にカメラマンだと勘違いされている私が、時折頼まれるお願い、それは、遺影の撮影です。通常は、遠い街の写真館まで、まだ歩けるうちに撮りに行くのですが、初めての本格的な撮影に緊張するため、顔がこぼれてしまい、どうにも自分らしくない——そんなお年寄りたちにとって、

住み慣れたヤオトンで撮影するわたしの即席写真館は、いつも通りの顔を写してくれると、なかなか好評でした。

驚いたのは、その「遺影」をご本人たちがすぐに壁に掛けてしまうということ。ご自分の肖像写真として飾られるのですが、亡くなった後もそこにあり続けて後を生きる家族を見守る写真だと考えると、撮った身としてはちょっと複雑な気分です。そんな私を尻目に、「もう準備はできた。すべては息子たちにまかせてある。」と喜んで話しながら、台所で今日も食事の準備に勤むおばあさん達を見ると、こちらもなんだか嬉しくなってしまう。

陝北のお葬式で、参列者はふつうは白い衣を着るのですが、ひ孫世代より下の世代の子供たちには、めでたい色である真っ赤な服を着せる風習があります。ここにも、世代が循環していくことへ切ないほどの願いを感ずいます。彼らの老いの心づもりに、なんとも晴々としたものを感じるのは、きっと私だけではないでしょう。



自分のなかの循環——同じようで違う剪紙

ここまで、一年という季節の循環、人々の世代間の循環、さらに大きな魂の循環をみてきました。最後に、日々の暮らしの循環、それも自分自身の中にもちょっとした循環が

あることをみて、お話を終えたいと思います。

前回（‘わんりい’ 10月号）の文章でも書いた剪紙には、たくさんのモチーフが描かれますが、それらは土地の人々が共通にもっている世界観や暮らしのあり様を描いたもの、つまり同じ源泉から生み出されたものがほとんどです。

そんなわけで、同じ題材の似たような構図のもの、たとえば同じ作り手が、十八番である同じ「ねずみの嫁入り」の場面を、生涯のうち、何百回も切ることにはよくある話です。ただし、彼女たちはそのひとつひとつの剪紙を比べ、きまって「同じようで全然違う」と表現します。これは単なる売り文句というよりも、むしろ同じ絵柄を繰り返し切り出すごとに、アレンジが加えられて変わっていく、その過程を楽しむからに他なりません。他の人には同じように見えても、自分にとってはささいな、でも小さくはない変化が、その繰り返しの中にはあるのだと思います。陝北の剪紙の切り手に限らず、現代日本の都市に暮らす私たちもまた、日々、小さな時間の循環を重ねる中で、同じだけ違う自分

を生活しているのかもしれない。

陝北農村の人々から習い得た、大小さまざまな循環の輪は、いつも同じ軌道を描く輪ではなくて、いうなればコイルのような螺旋——それは両隣とまったく同じではなくちょっといびつな形かも——を描きながら、未来へと向けて進みゆくものでした。私のまわりの日本のお年寄りや、農家の人々にとっては、陝北の人々の循環する「時間」感覚は、むしろ近しく感じられるかもしれません。他方、確かな来年も見えず、抛り所なく時を過ごしている私自身にとっては、「循環する」時間をもつことそれ自体に、明日を生きるためのヒントがあるように思われるのです。

◆丹羽朋子（にわともこ）

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

一芯社ウェブサイト (<http://yixinshe-books.jimdo.com/>) から、本エッセーのバックナンバーもダウンロード可能になりました。

◆ 水汲みのロバ車

元は立派だったと思われる建物の前には、花壇か菜園があったような小さく平らな地面が、三段くらい徐々に下っていて、その先は目の前に小さな崖が立ちはだかり、その下を道が走っている。家の庭から直接道に出たが、道に降りられるのはそこだけで、左右には崩れた建物や、こんもりとした地面が続いていた。道に出て、振り返って眺めると、敷地の境界を示すように崩れた煉瓦の建造物が残っていて、中には砂が吹き溜まっていた。その道は、道幅も比較的広くて、昔は人の往来もあり、盛んに利用された道のような感じだ。

崖の根元付近に石造りのヤオトンのような小さな窪みがあったが、それが、地域の水汲み場だとのこと。覗いてみると、洞穴は少し低くなっていて、底に水がたまっていた。「滾々と湧き出す」とは言えないけれど、澄んだ水がかなりの量溜まっていて、周りには確かに水が滲みだした様子が見える。

夕方になって、日中の暑さも一段落したところで、水辺の夕涼みというには程遠いけれど、とにかく水の近くで一息入れていると、駐車場の方向から、荷台にドラム缶を横にして積んだロバ車が、水を汲みにやって来た。御者さんは、我々が涼んでいる所で、ロバの向きを変え、ドラム缶を水場に近づけてから、持ってきたホースを泉に差し入れて口で水を吸い、サイフォンの原理でドラム缶に水を入れ始めた。このドラム缶は、荷台に積まれた上部、つまりドラム缶の腹に水の取り入れ口があり、荷台の後ろの部分、つまりドラム缶の蓋にコックが取り付けられ、底から水を出すようにした水タンクになっている。

水がドラム缶に溜まって行くあいだ、御者さんは周路さんや運転手さんと世間話をしていた。会話の断片から、水汲みは毎日しているらしいと分かったが、水が

家庭用なのか、売るためのものなのか、訊きそびれてしまった。話し込んでいるうちに、10分たらずで水がドラム缶から溢れてきたので、慌ててホースを外して水を止め、ロバに重くなったドラム缶を曳かせて帰って行った。

初めのロバ車が視界から消えないうちに、また新たなロバ車がやって来て、同じように水を汲み始めた。すると、今度はこの車が終わらないうちにもう一台がやって来て、初めのロバにちょっと動いてもらって、2台が並んで水汲みを始めた。この時間帯は水汲みラッシュのようで、又別のロバ車がやって来たが、3台同時には無理のようで、先の1台が終わるのを待っていた。

こうして、我々の目の前で4台のロバ車が、水をドラム缶に満杯にして帰って行ったが、崖下の泉の水位は大して減っていなかった。どうやらこの泉、滾々と溢れ出すことは無くても、日常生活用水汲み上げには支障が出ないほどには水を提供してくれているようだ。私がもう少し中国語を自由に操れたら、この泉の水利権の問題とか、分配の方法とか、汲み上げの頻度とか、いろいろ訊いて見たいと思ったが、ちょっと無理と判断して諦めた。日中の暑さによる身体の火照りは収まったけれど、心にはちょっぴり未練を残しながら、民族文化村の水場をあとにした。

延川の街に戻って、夕食は「百姓食堂」で摂る。中国語の「百姓(bǎixìng)」は民衆、一般市民という意味で、「百姓食堂」は気取らない「皆の食堂」といったところだが、そこで個室を用意して貰った。思いがけず、周路さんの知り合いで、この地方の民間芸術「剪纸」作家である高さん姉妹と食事を一緒にした。食事のあとは、昨日と同じホテル金橋賓館に戻って宿泊。初日の重労働のせいか、今晚も歩かず眠りに付く。

◆ 街頭での朝食

朝7時にロビーに集合、朝食のため外に出る。ホテル近くの広場の一角で店を出している店とも言えない店で朝食。我々は、油条と豆腐脳・ゆで卵を注文する。油条は、中国何処へ行っても朝食の定番メニューで一番人気があるようだ。強力粉を練って、柔らかいものを棒状に伸ばして油で揚げたもので、初めは見るからに油っぽくて、「朝から食べるのはどうも…」と敬遠していたが、食べ慣れるとなかなか美味しくて、今では一本の半分は食べられるようになり、テーブルに載っていると、思わず手を伸ばしてしまう。我々が注文したもう一品の豆腐脳は、豆腐に醤油味の薄い葛あんをかけたもので、店によってあんにきのこが入っていたり、葱が散らしてあ



崖際に掘られた水汲み場

たりするが、汁のだしはあまり効いておらず、それが却ってさっぱりして美味しい。

豆腐は、大きな器に豆腐を固めて、そこから玉杓子で掬って器にいれ、その上からあんをかけて供するのが多いが、店によっては、予め器に豆腐を固めておいて、注文があるとそこへあんをかけて供することもある。私は、初めて食べた時から好きになり、外で朝食を食べる時はいつもこの豆腐脳を注文することにしている。

私達は注文しなかったが、この店で売っていたのは包子(小さな肉まん)・豆乳・ワンタン等だった。これらは北京でも同じようなもので、店によっては各種お粥を用意しているところもある。昼間も食堂を営んでいる店が朝早くから開けていることもあるが、私達が今朝食べたように、広場の片隅で、災害時の炊き出しのような雰囲気食べさせるところも多い。こんな店が朝早くからあちこちに開店するので、中国の人々は家で朝食を用意しなくても生活出来る。

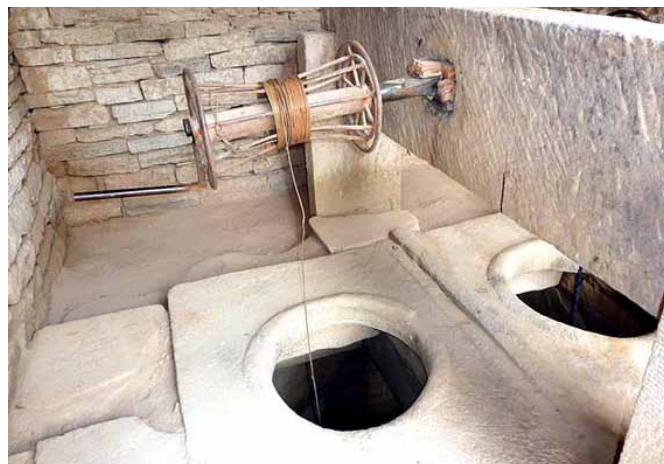
この朝食の値段、今回は周路さんにお任せしてしまったので、いくらか分からなかったが、3年前の北京では、豆腐脳と油条を食べても1元ちょっとで済んでしまった。最近是中国の物価もかなり上がっているが、此処の物価は、北京よりは半分安いはずだから、今でもこんな値段で食べられるかも知れない。

◆ 楊家溝革命記念館

朝食の後、我々は身軽ないでたちで車に乗って、北の方を目指した。1時間ほども走り、幹線を走ると、道の舗装は無くなり、対向車が来たらすれ違いが出来ないような道になった。ふと気づくと、車は緑の畑が広がった中の小川の畔を走っていた。道には草が生えていて、農道のように、普通のツアー客は絶対入って来ないような道を、運転手の楊さんはどんどん進んで行った。

暫く行くと車は、農地に面して崖に石作りのヤオトンの前で停まった。石造りで立派だけれど、ちょっと荒れた感じのする門を入ると直ぐ石段があって、上り詰めた所に女性が立っていて、入場券を売っていた。切符を買って中に入ると、頑丈な建物に囲まれて庭があり、その片隅からまた階段を上ると、畑に出られるようになっていた。

建物は現在も人が住んでいるようだが、見物人が入れる一角には、石の床に穴が開いたところがあった。そこには丈夫なロープを巻きつけたウィンチが設置されていて、ずっと下までバケツを下ろして水を汲み上げることが出来る。今は使っていないようだが、敵や盗賊が攻めてきた時に、籠城しても水が確保できるようにしたものだそうだ。この家には、更に馬車が登る坂道が付けてあり、轍の部分は平らに、真ん中の馬やロバが上る部分は、石を縦に埋め込んで蹄が滑らないような工夫をして



屋内の水汲み場 ウィンチで水をくみ上げる

いる。その出入り口にも、途中で頑丈な門扉が設けてあり、一旦閉めてしまったら、下からあけるのは殆ど不可能だ。

この家の更に上方に、今もしっかり建っている家が見えた。行ってみると、そこは革命記念館で、手入れも行き届いている。今見てきた家と同じような造りだが、もう少し規模が大きいので、革命軍が接収して、毛沢東や周恩来等軍の幹部達が居住し、作戦本部を設置したようだ。元の持ち主は、外国との接点もあった人のようで、ヤオトンの窓の雰囲気やヨーロッパスタイルだったり、和風だったり工夫を凝らしてあると説明があった。トンネルの坂道を通って上の方の建物に行けるのは、元からあったものなのか、革命軍が増設したものなのか訊きそびれたが、革命軍本部に相応しい造りに感じられた。革命記念館というのに、見学者が非常に少なく、閑散としているのは、暑さが厳しいこの時期のせいだろうか？

革命記念館を出て、又裏道を走ったので、さすがの楊さんも迷ったようで、農作業をしていた人に訊ねて、次にたどり着いた所は、さらに頑丈な灰色レンガの建物で、「姜氏荘園」と額が掛かっていた。

崖を背中に背負って、垂直なレンガの壁が聳え立ち、中に入って分かったことだが、壁の上部には銃眼が開いていて、外の様子を眺め、必要なら攻撃も出来るようになっていた。これが個人の家の装備だから驚く。この地方は、昔から異民族の侵略が激しく、外敵からの護りも必要だったようだが、この家の建設時期は、清朝も後半に入ってからだそうなので、外敵への備えと言うより、匪賊など、無法者の略奪に備えたものだったようだ。

外敵への備えは完全でも、時代の流れには逆らえず、外見は威厳を保っているが、内部はかなり荒れていて、このギャップが歳月の無常をことさらに強く感じさせていた。中国にとって、最近の200年は真に激動の時代であったのだと、この地方の荒れた建物を見るたびに強く感じる。(写真提供：渡辺栄子) (続く)

福建見聞録 見て、聞いて、体験した中国 ② 劉薇・中国コンサートツアーに参加して

為我井 輝忠 (前福州外語外貿学院日本語専攻)

今回は、福建見聞録のタイトルから外れますが、7月に任期を終えて福建省から帰国後の中国体験をお伝えしたいと思います。帰国して2カ月ほどした9月初めに、日本で活躍している中国出身の女流バイオリニスト・劉薇 (Liu Wei) 氏が中国でのコンサートツアーを行うという連絡がありました。私は彼女の活動を支援する後援会に所属していて、これまで何度か彼女のコンサートに行ったり、さまざまな支援活動に参加していました。そのような経過からツアーに参加してみませんかというお誘いを受けました。

コンサートツアーは9月16日から23日までで、私がこのコンサートツアーのことを知ったのはツアーが出発する1週間前で、私が丁度上海に出かけようとしていた間際の時でした。現地からの飛び入りも可能とのことで、13日には先に上海へ向かいました。コンサートツアーが開催された都市は浙江省の寧波、杭州、慈溪の三か所で、いずれも江南地方の発展著しい都市で、劉薇さんが育った長江デルタ経済地区です。16日上海浦東空港で日本からの参加者とお会いし、すぐ最初の訪問地寧波へ向かいました。上海の劉薇さんのご両親も参加ということで、総勢15人のツアーとなりました。

コンサートは1回目が到着翌日で、17日夜の寧波逸夫劇場、2回目が18日浙江音楽院、3回目が19日慈溪市人民大会堂と計3回行われました。ピアノ伴奏は丸山滋さんでした。会場はいずれもその都市の一流の劇場で、大いに期待しました。

コンサートそのものはいうまでもなく大変素晴らしいものでした。劇場も立派でしたが、ただ観客の方々のマナーがどうも日本とは異なり、ハラハラ・ドキドキの連続でした。おしゃべり、演奏中の出入り、携帯電話のベルの音等、日本では考えられないことばかりでした。しかも、3日間とも子供の観客が異常とも思えるほど多く、会場内を走り回ったり、中には舞台上上がる子供もいたりして、さすがに関係者が走りよって注意する有様でした。

プログラムはいずれも共通で、馬思聰の「山歌」、「思郷曲」、「阿美族組曲」や日本人作曲家の貴志康一による「漁夫の歌」、滝廉太郎の「花」そして西洋人作曲家ドボルザークの「わが母の教え給いし歌」をはじめとしてポルンベスクの「バラダ」そしてバルトーク、グラナドス、ピアソラ等の作品が演奏されました。

ところで、中国人の観客にとって自国の作曲家と言いつつも、馬思聰は恐らくはほとんど知られていない作曲家ではないでしょうか。劉薇さんは彼のことを知って



寧波逸夫劇場



馬思聰への思いを語る劉薇氏



寧波にて

もらいたいという思いを込めて演奏されたのでしょうか。どの曲も素晴らしい演奏で、その強い思いが伝わって来るようでした。また、今回演奏会を開催した辺りではクラシック音楽のコンサート自体が珍しいものと思われる。その意味で今回の演奏ツアーは大変よい試みと言えるでしょう。これからも彼女の中国での第2、第3の試みを期待しています。

▲劉薇音楽ホームページ: www.liuwei-music.com

牡丹江市は、市内を貫いてゆったり流れる牡丹江^{ムータンジャン}という川をそのまま市の名前とした。日本の川は〇〇川が殆どだが中国では〇〇江が多く、また黄河のように〇〇河もあるが〇〇川という名前の川を私は知らない。

この都市は黒龍江省の省都であるハルピン市の東南東の方向で約300km離れたところにある。ロシアとの国境までは約100kmでロシアには近い。市の規模は同省の中で3番目である。省内で何番目かを知る簡単な方法がある。それは車のナンバーを見ることである。

黒龍江省のナンバーの頭は「黒」の字から始まる。黒の次はアルファベットである。Aは省都である。黒龍江省であればハルピン市がA、遼寧省であれば瀋陽がAである。牡丹江市は黒龍省の3番目の都市なのでCである。

さて、牡丹江市は北緯45°くらいのところ

にあり、日本では旭川よりずっと北である。従って冬はとても寒く、この大きな牡丹江は凍結する。この都市はハルピン市ほどの華やかさはないが、そこそこ大きな都市である。ここを訪れた時、牡丹江を見るためホテルから地図を見ながら歩いて行った。ほどなく花が咲き乱れている公園が見え、その一角に何人かの女性たちのモニュメントが目飛び込んできた。鉄砲を持った女性の姿や傷ついた仲間に肩を貸しながら歩いている女性たちの像もあり、数えると8人いる。

同行した友達によると「八女投江」^{バーニョウトウジャン}の記念碑で、日中戦争のとき、日本軍に追いつめられ逃げ場を失い、牡丹江の支流の川に8人が揃って身を投げたと言う有名な事件を表したものであると言う。大連に帰ったあと会社の人、何人かに聞くと、有名らしく皆良く知っていた。東北三省(黒龍江省・吉林省・遼寧省)は、日本軍との戦争が各所であり、そのためあちこちの都市に「〇〇抗日記念館」があり、いろんなモニュメントもある。いくつか見たが、生々しさを目をそむけたくなるような展示物のオンパレードである。江沢民が主席の時、特に反日教育に力を入れたが、記念館の文字も彼が書いたも

のが多い。

このような施設を見ると本当に日中友好などができるのかと思われてくる。それだけ日本軍も残虐なことをしたと言うことだが、まだ戦争を体験した人が多く生存している中ではむつかしいことかもしれない。中国人の友人に「何で日本を攻める施設ばかり作るのか。イギリスなんかアヘン戦争を仕掛けたり、中国の世界遺産級の建物をあちこち破壊したのに反英記念館などないのはどうしてか」と言ったがハッキリした答えは返ってこなかった。

ところで、2009年4月頃からNHKで「遥かなる絆」という日本人の残留孤児を扱ったドラマ(6回に分けて放送)を見られた方もあろう。私は、毎週ホテルがドアの下から差し入れてくれるNHKの番組表をみながらテレビをつけた。4回目の放送だったが、数ヶ



八女投江碑

月前に旅行した牡丹江市(牡丹江市周辺はその昔開拓団が多く入植した土地でもしられている。)付近が舞台であった。

感動的なドラマですぐテレビ画面に釘づけとなり一人涙を流していた。これは城戸幹(1941年旧満州東北部生まれ。苦難の道を歩いた末、1970年日本に帰ることができ両親との再会を果たした。)という人の実話のドラマ化で、この方の娘さんが父のことを調べて書いた「あの戦争から遠く離れて」(城戸久枝著)という本が出版されているので興味のある方は、一読されるとよい。これを見ると戦争直後に敵国の子供を育ててくれた中国人もたくさんいたわけで、いろいろと考えさせられた。

国情も文化も考え方も違う両国ではあるが、一衣帯水のお隣さん同士であり、1日も早く真の日中友好の時代が到来することを望むものである。

最後に牡丹江市の名物は何かと思って友人に聞くと、「熊の肝」のお土産が有名とのこと。そのための熊牧場もあるそうだ。私の牡丹江市に対するイメージは明るいものではないが、何時の日か凍結した牡丹江を見に行きたい。

ダンブーラの石窟寺院

前回は世界遺産シリーズを休ませていただき、川上村への旅行の話をさせていただきました。今回は世界遺産シリーズに戻って、10月号でお約束したダンブーラの石窟寺院を紹介します。

ダンブーラは前回紹介したポロンナルワから直線距離で約40Kmですが、真っ直ぐ行ける道路は無いので一端ハバラナまで戻って国道6号線経由で約60Kmほど約2時間の旅になります。キャンディとアヌラーダプラを結ぶ国道9号線と、コロンボからクルネーガラやハバラナを通してトリンコマリを結ぶ国道6号線が交差する地点にダンブーラの町があります。

ダンブーラの町は他の町と同様に旧市街地と新市街地に分かれています。旧市街地は石窟寺院を中心にしてツーリストの為のゲストハウスと住人の為の雑貨店があるだけの静かな町なのに対して、新市街地にはバスターミナルや銀行、商店街、地域総合病院があるだけでなく、地域振興の為の市場(Dedicated Economic Center)があって農作物の集積場になっているために早朝からトラックの出入りが激しく、一日中結構な賑わいをみせています。

市場の仲買人組合代表のマンガラ氏は2002年に視察の為に日本を訪れた際にわざわざ町田まで足を伸ばしてくれた友人で、僕がスリランカを訪問する際にはダンブーラまで行って彼の自宅で飲み明かします。その所為で、ダンブーラは一番多く訪れたのに、世界遺産の石窟寺院にはたった2回しか行った事はありません。

ダンブーラの石窟寺院の歴史は紀元前1世紀に始まります。この石窟寺院はこれまで紹介してきた世界遺産とは違ってシンハラ王朝の都になった事はありません。最初のシンハラ王朝であるアヌラーダプラ王朝から、最後の王朝となるキャンディ王朝までの約2000年間に亘って、各王朝が第1石窟から第4石窟までを建造し、前王朝の建造物を修復拡張した結果スリランカ最大の石窟寺院となりました。

一番新しい第5石窟は英国支配下の1915年に建造されました。英国の植民地政策では信仰の自由は保証されていたようです。尚、第1石窟と第2石窟にある壁画はポロンナルワ王朝とキャンディ王朝時代に大規模な修復が行われたと言われていて、現在の壁画が建造当時の物かは定かではありません。

第1石窟にはこの石窟寺院で最大の仏像である長さ約14mの涅槃像が祀られています。紀元前1世紀にインドのタミール軍の侵攻によってアヌラーダプラから

逃れた王がダンブーラの岩山の石窟に身を潜めて反撃の機会を待ち、後にタミール軍を打ち負かしてアヌラーダプラを奪い返せた事を感謝して石窟寺院を寄進したと伝えられています。

第2石窟は最大の石窟で56体の仏像と石面全体に描かれた壁画があります。第2石窟の中央部天井の割れ目からは雫が落ちて、真下の床に置かれた壺に溜められ聖水とされています。ダンブーラは「水の湧く岩」という意味で第2石窟がこの寺院の名前の由来になっています。第3石窟は18世紀後半にキャンディ王朝によって造られ、62体の仏像が納められています。第4石窟もキャンディ王朝の末期に造られました。

第4石窟に纏わる話として、約10年ほど前にヨーロッパ某国の女性が坐像に上って手の平の上に座り、坐像と同じ様な姿勢で写真を撮ったという事件がありました。仏教徒にとっては衝撃的な出来事で、この後は暫らくの間は石窟内での写真撮影が禁止されていましたが、現在は撮影が可能になりました。第5石窟は前述したように1915年に建造された新しい石窟で、黄金の涅槃仏とキングコブラに守られた仏像が有名です。

石窟に入ると少しひんやりとした空気と、張り詰めた緊張感がありました。これはスリランカ人参拝者が、静かにそして厳かに一途に祈りを捧げている姿や歳月の重みを感じさせる石仏に圧倒されたからだと思います。観光気分で行ってきた僕も友人たちも、息を潜めるような圧迫感がありました。

ダンブーラは石窟寺院で有名ですが、各国からの駐在員にとってはシンハラニューイヤー休暇、クリスマス休暇、僕たち日本人にとってはお正月休暇を過ごす場としても最適です。ダンブーラ郊外のカンダラマには、スリランカを代表する建築家であるジェフリーバウワーが設計した、スリランカの雰囲気を取り入れた外国人好みのリゾートホテルを含めて多くの宿泊施設があり、シーギリヤにも近い事から駐在員だけでなく外国からの観光客も集まってきました。

カンダラマ湖の周囲にはジャングルが広がっていて野生の象や鳥などが水遊びに来る姿がみられます。各ホテルからのジャングル探検ツアーも多く、周辺の世界遺産を見物するなどして、駐在員たちが日頃のハードワークからリラックスできる場所の一箇所です。LTTEとの紛争が盛んな時にも、最前線から十数キロしか離れていないにもかかわらず、僕を含めて多くの駐在員が集まっていました。次回はキャンディを紹介します。(続く)

日本にいと、アフリカだけではなく、世界中の出来事が遠くの違う時代に起こっているような感じを受けることがある。幸せなことに私の今は、昨日も今日も、おそらく明日も間違いなく「生活出来る」ことが当たり前で、戦争も民族闘争も、暴力的な政変も無い日常だ。

電気も水道もガスも毎日きちんと供給されている。明日の食べるものがないと訪ねてくる友人もないし、失業中なのに酒場でビールをたらふく浴びて夜中にドアを叩く友人もない。それほど生活に困る人が今の私の周りにはいない。今の自分はなんとか幸せで恵まれた生活をしている。そんな今の生活が当たり前ではなかったケニアに暮らしていた8年前の生活を思い出す出来事が最近あった。

ケニアの叔父が仕事で来日したのだ。叔父は、私が御世話になった孤児院の院長先生で、60歳を目の前にしての2回目の来日だ。日本の支援者達との会合の合間をぬって2日間だけ我が家に来て来た。叔父はケニアで小学校の校長先生もし、たくさんいる子供達の多くを大学まで進学させ、教育には熱心に投資してきた。院長を務める孤児院の子供達の進学にも積極的に支援していた。

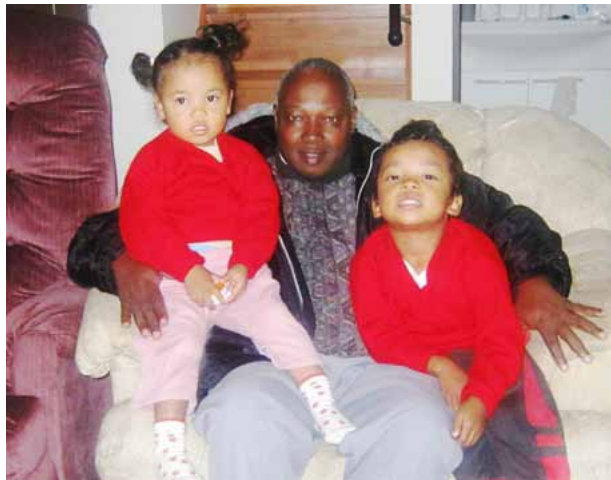
ケニアの小学校教育は無料となったが、高校卒業後、ケニア全国统一進学試験にパスして大学に進学できるのは半分かくらいだ。運よく進学できたとしても、学費が続かず卒業するのも大変なことだ。そして大学を卒業してもその後の就職となるとまた厳しい道が待っている。同一民族の縁故採用もあるし、勉強の成績以外の要素も大きく関わってくる。大学を卒業することが一生の安泰を保証しないと分かっているながらも、ケニアの多くの親達の希望は、子供になるべく教育を、いい教育を受けさせるのに熱心だ。

叔父の子供も、大学や専門学校へとそれぞれに進学し、卒業した。私がケニアにいた頃、小学生や高校生くらいだった子供達は、私よりみんな年下ではあるが、それぞれ大学を卒業し、就職し、結婚し、子供をもうけ、家族を作っている。子供の数も皆私より多い。

叔父が沢山の苦勞をして子供に「教育」を受けさせる

には訳がある。叔父は言う。「教育」は単に仕事に就く為の職業的技術や専門知識の習得だけではない。教育は、「心」と「頭」を育てる。教育を受けた人間は、たとえ思い通りに行かないことがあろうとも、生活が苦しいからといって短絡的に盗みをするとか、現実から逃げてしまおうとか、簡単に人生を諦めようとは思わないのではないのか。苦しい時も自分や社会について冷静に「考える」姿勢を知らず知らずに身につけることができる。

叔父は、いつも希望を忘れない人だ。たとえ、スタートラインで躓いても最後まで諦めない。逆転ホームランを最後の最後まで諦めず信じられる人だ。ケニアのような社会は、確率的に言えば自分が望んだようになる社会ではない。不慮の事故など思いがけないことに遭遇することも多い。日本の社会にいるように自分の努力でどうにかなることでもない。たとえ進学できて勉強を続けられても、たとえ学校の成績が



叔父と我が家の子どもたち

良かったとしても、何かが約束される事ではないのだ。そんな社会で、自暴自棄にならないで、最後まで諦めないで、自分を信じる。

私がない間の8年間のケニアの様子を叔父から聞く。大統領選挙後の暴動のこと、別の叔父が行方不明になったこと、友人が射殺された事、書ききれないほどの沢山の出来事や事件があった。「生きてあること」がすでに大変な幸運に巡りあわせているという事実を私は忘れかけていた。叔父と話していると、ケニアでの生活がいろいろ思い出され、あの時私はケニアの人と共に同じ時を生きていたことを改めて思った。

久しぶりに義母に電話をした。私のために、小学校で習ったきりの英語の本を出してきて、勉強し直してくれた義母だ。片言だった英語も今はもう無理なく話せるようになっていく。

私「叔父さんが来て、ケニアが懐かしくなりました」

義母「ははは。だってケニアにはあなたの家があるじゃないの！」

アフリカから遠い日本。でも母はこんなにも近い存在だ。電話のあと、少しほっとした。

どこまでもどこまでも続いていた草原の向こうに、まるで曇り空のように茶色い街並みが浮かんできた。高度4000メートルの世界に広がる大草原の真ん中に忽然と現われる天空の町、理塘だ。

私を乗せた北京軍団の車は街の郊外に向かって進んでいた。前方の小高い丘の上には大きなチベット寺院が見える。寺院の門前にはチベット仏教の祈りの言葉が刻み込まれたマニ石が城壁のように積み上げられたマニ塚があった。瓦のような薄い石板におもいおもいのデザインされた文字が彫りこまれ彩色されたマニ石は美しく、思わず積まれているマニ石の中から自分のお気に入りの一枚などを探してしまう。

標高が高いせいか理塘の空は日本の空よりもずっとずっと青い。雲ひとつない群青色の空から薄い酸素を通して熱波のようにジリジリと照りつけてくる太陽は暑いというより熱いと感じられる程であったが、寺の山門をくぐり太陽に焼かれながら境内を通過して薄暗い寺院の中に入ると、とたんに空気はひんやりとした。暗闇に目が慣れて浮かび上がってくる寺院の内部は柱といわず天井といわず何処もかしこもびっしりと極彩色に彩色されて、赤、青、緑、黄色など原色の色鮮やかな布地に金糸で刺繍が施された金襴緞子様の御簾が幾重にも垂れ下がっている。

四方の壁は様々な仏の姿や極楽図、地獄図、六道図、しゃれこうべのネックレスを首にかけ炎の中で目玉の飛び出した人の生首をふりまわす憤怒像や鬼の形相で女神と交わる歓喜仏像など怪しくも魅惑的なチベット仏画で隙間無く埋め尽くされ、本殿の奥には体中に貼られた金箔で黄金色に輝く数々の仏像が安置されていた。それらが渾然一体となり暗闇の中にびっしりと灯された蠟燭の灯に揺らめいて浮かび上がる様子は、まるでその空間自体が極彩色の曼荼羅のようで、太陽の輝いている表の世界から突然異世界に迷い込んだような錯覚に陥り頭の芯がボーっとしてしまう。

寺の奥のほうではキリキリキリと不思議な音がしていた。近づいてみると、数人の僧侶が床に屈みこみ一心に砂曼荼羅を描いているところだ。細い筒の中に彩色された細かな砂を詰め、細い棒で擦りながらその振動で少しずつ少しずつ砂を落として、二畳分程もある曼荼羅に細密な模様を描いていく気が遠くなりそうなほど細かな作業だ。

すでに完成している曼荼羅の中心部分は、驚くほど微細な部分までが綿密に書き込まれ、色分けされた砂でグラデーションが付けられて、それが砂で描かれていると俄には信じられないほど繊細で美しかった。床に這いつくばって息をつめ、一分の手元の狂いも許されない凄まじい緊張と、集中力を必要とされている作業を目の当りにして、これ程の手をかけて生み出される美しい砂曼荼羅が、いずれ完成

した後に壊されてしまうものだと思うと切なさに胸苦しさを思えるほどであったが、その儚さが仏教の世界観でいう諸行無常を表わしているのだという。

ひと通り寺院の内部を見学し終えて表に出ようとする、二階にあがる階段の上から北京軍団に声をかけられ見上げると、僧侶の一人が二階の奥にある部屋の鍵を開けて扉を開いているところだった。あ、二階にも部屋があるの？ 無造作に階段を登りドアの中を覗き込んだ私は思わず息を呑んだ。扉の内側は部屋ではなく、細いテラスの通路のようになっていて、その向こうは建物全体が吹き抜けになっており、三階建の建物に相当するほどの大きな大きな仏像が私を見おろしていた。先程まで私達が見学していた寺院の後ろにはこんなに大きなご本尊様が隠されていたのだ。

思いもかけずに向かい合ったチベット佛の包み込まれるような慈愛の眼差しに虚を突かれ、この旅の間中に感じていた様々な気持ちが一気にこみ上げてくると思わず涙がこぼれて止まらなくなってしまった。何故自分が泣いているのか訳もわからず一心に仏像に向かって手を合わせていると、そんな私の様子を見て傍に立っていた僧侶が少し苦笑していたのが恥ずかしかった。

寺を出て車に戻り参道となる道路をゆるゆると走っていると、道路脇に先程のマニ塚に積まれていたようなマニ石を並べ、どうやら販売しているらしい家があった。

車を止めた北京軍団は、「チベット地方を旅した記念にこれを土産に買って帰るのも良いじゃないか」と語り合いながらマニ石を物色していたが、店主らしい人物はその場におらず売値がいくらなのかも判らない。どうやらその家の子供らしい少年がそばにやってくると、軍団の一人が一番美しく彩色されていたマニ石を取り上げ、おどけた様子で「おい坊主、これは10元だよな？ ほら、10元やるから一つくれよ」と明らかに揶揄するような調子で子供に話しかけ、子供がかぶりを振ると今度はやにわに高圧的な態度で「おい、お前の親父はどこに居るんだ!? 今すぐ呼んでこい!!」「早く行け!」と怒鳴りつけた。

それを見ていた私は嫌な気持ちだった。これまでにも薄々感じていたが彼等はチベット族の土地を旅させてもらいながらもその土地の人々を自分達より劣った民族と見下している様子なのが伝わってくる。今回の旅を通してチベット民族の人や暮らしに深い親愛の気持ちを持っていた私は、その場に一緒にいる事でそんな彼等の仲間だと思われなくなかった。

そういえば・・・亜丁村の宿屋で彼等が亜丁の少年を食卓に誘った時、いつもは人懐こい少年が北京軍団とは全く交わりたがらなかった様子を思い出した。あの時の私には

訳が判らなかつたが、若しかしたら垂丁の少年は彼等が自分たちを蔑んでいる空気のようなものを敏感に感じ取っていたのかもしれない。

そのうちに何処から現われたのか先程の少年の父親と見られるマニ石屋の店主も姿を見せたが、北京軍団は値段の折り合いが付かなかつたのか交渉は決裂したようだった。美しくデザインされたチベット文字で祈りの言葉が刻み込まれたマニ石は、持ち帰れるものなら私も欲しかったが身軽が必須の一人旅で重い石版など持ち帰るのはとても無理だ。彼等がやり取りしている間、せめてもの記念にと私は自分の手帳を取り出して石に刻み込まれている祈りの言葉、オン・マニ・ベネ・ホンの文字をスケッチで写し取った。

その後別の土地へと進む予定の北京軍団は私を降ろすために車を理塘の街中に向けた。ひょんな事から思いがけず3日間行動を共にする事となった北京軍団ともこれでお別れだ。

「小姐、理塘の宿は何処にするつもりだい？」

3年前の旅でも烏理氏と共に理塘を訪れていたとはいえ、人に連れられて歩いただけの土地など全く何も覚えていなかったが、宿の事には心当たりがあった。ピサ延長の為に暫く滞在していた成都の宿で知り合った日本人旅行者の青年に、「理塘で泊まるなら此処が手軽で良いよ」と勧められた宿の名前を手帳に記してあったのだ。それを運転していた石頭に差し出して見せ、彼が車の窓から通行人にその場所を尋ねると、さして広くもない街の事で、あっさり目的の宿は見つかった。

私は車を降りるとだいぶホコリにまみれているザックを車の後部から取り出した。垂丁から此処まで車で快適に送り届けて貰った事はとても有難かつたが、別れの挨拶を交わして走り去っていく北京軍団の車を見送ると、どこかせいせいしたような気分になっていた。きっとそれは北京軍団の方も同じではとも思われたが、特に誘われていた訳でもないのに自分の都合であつかましく居候的同乗をさせて貰っておきながら、その相手を疎ましく思うなど全く身勝手な自分の心を恥じながらも、私は開放感に大きく伸びをしてザックをとりあげ宿の門をくぐった。

理塘の宿は1泊20元だった。客室は2階にあって日当たりが良く、窓からは宿の前を走る道路を見渡す事ができた。洗濯物は屋上に干せるトイレとシャワーは共同だが、それが当たり前旅を続けている私には何の問題もなく快適な部屋だ。

部屋に荷物をおろして一息入ると、早速新しい街に着いた時の恒例行事である街の探検に繰り出した。

以前にこの街を訪れた時の記憶を手繰りながら行き当たりばつりに歩き回り、街の感触を確かめるような気分

食いをしてみたり、たいして必要でもない雑貨を買い物したり、観光客向けなのかお洒落好きな遊牧民相手なのかアクセサリーを売る店が軒を連ねている場所をひやかしたりした。ちょっと珍しかったのは、公衆電話の代わりに店員にかけたい番号を告げて電話をかけてもらう公衆電話屋さんや、街外れに水がジャージャーと流れる音のする店があり、いったい何かと思えば、ちょうど日本のコインシャワーのように、お金を払ってシャワーを浴びる場所らしい。だいぶ昔にチベット人は身体を洗う習慣が無いというような話を、何かの本で読んだような記憶があったが、こんな店があるのならそんな全くの嘘じゃないか。

康定を出て以来滞在していた稻城や垂丁と比べ、理塘は久しぶりに街と呼べる場所だ。散歩がてらに歩きまわればそれなりに見る物は色々あったが、何よりも目を引くのはこの街の人間だった。

大草原の真ん中にある土地柄ゆえか大柄な体躯に鋭い目鼻立ち、髪を長く伸ばし、動物の毛皮やシルバーのアクセサリーを身につけて、ジーンズにブーツ、腰には短剣、テンガロンハットを小粋にかぶった、アメリカ西部開拓時代のカーボーイそのままのような遊牧民の姿が圧倒的に多いのだ。道路脇にはそんな彼等の現代の馬であるバイクがズラッと並んで停めてあり、どれも競い合うように派手な飾りが施してある、そんなバイクに跨って長い髪をなびかせ走り回る男たちは現代版イージーライダーと呼びたくなるカッコ良さだ。

現代の世の中に、まだこんな世界があるなんて！地に足が着かないほど彼等の姿に目をひかれながら、街の目抜き通りとなる一角を通りかかると、歩道には何やら大勢人だかりがしていた。何だろうと覗き込んでみれば、そこでは地面に賭場を広げて街頭博打の真っ最中なのだ。ルールはいたって簡単で、大きな紙を6分割して線を引き、それぞれの枡の中には絵の具で描かれた龍、象、鶏、パンダ、虎、亀の絵が思わず笑ってしまいそうなほど拙い姿で描かれている。

お客が好きな動物の絵のマスにお金を張ると、胴元がこれまた同じ動物の絵が六面に貼られている3つのサイコロを菓子箱の中で振り、蓋を開けた時に自分の賭けた動物の目が出ていたら配当金がもらえるという単純なもので、サイコロの出目の数により配当が増え、3つのサイコロ全ての目が自分の賭けた動物だった時に最高倍率となる訳だ。あまりに解り易いルールに惹かれてか賭けに参加する人間も多く、場は盛り上がっていたが動いている金額はどれも10元、20元といった小額紙幣ばかりのちよっぴり微笑ましいものだった。中には最初一回で賭けたお金を倍にしてすぐにその場を離れていく利口者もいたが、大抵は最初にちよっぴり勝っても結局最後には勝った分を全てすってしまうお客が殆どで、やっぱりそこは博打なのだ。胴元はこんな下手くそな動物の絵とお

菓子の空箱に3つのサイコロだけで、それなりに結構儲けている様子だ。

お金儲けてアイディアだなぁ〜と思わず感心してしまっただが、何処かのお金持ちが大金を張って大勝してしまったらどうするんだろう？胴元のおじさんはどう見てもそんなに裕福そうな身なりでは無いし、ここはやっぱり胴元もお客も少額紙幣でやり合うのが原則のような田舎町ならではのチープな街頭博打なのだろうか。

下手くそな動物の絵に大の大人が一喜一憂している、こんなチープな街頭博打がこのチベタン・カーボイの街に存在しているという事が嬉しくなってしまったので、私も話の種にと思わずポケットの中のサイフを握ってしまったが、考えてみればまだこの先も旅を続けたい身の上の私としては限られた中国元を無駄に使う訳にはいかないのだ。それに加えて冷静に観察してみれば、そんな街頭博打に首を突っ込んでいっているのはちょっとやさぐれた雰囲気な男ばかりで、夢中になって覗き込んでいる女は私一人だ。皆の注目を浴びるのが照れくさかった事もあり、博打に参加するのは踏みとどまって盛り上がる輪の後ろで様子を見ていると、そこにまるでハーレーの様に飾りが施されたバイクに跨り、フリンジ付きのお洒落な革ジャンを羽織った、見るからにカッコマンの若い遊牧民の男がやってくると博打の輪に加わってきた。

黒皮のテンガロンハットにミラーのサングラスを光らせて、気取った仕草で気前良く百元札を何枚か取り出し、胴元に命じて細かく両替すると手馴れた様子でお金を張っていく彼の様子に否応無く皆の注目が集まった。賭けている動物も龍だとか虎だとか、きっと彼の好みなのだろうがちょっとカッコいいイメージの動物なのが微笑ましい。ところが

どういう訳だが、この遊牧青年が賭ける動物、賭ける動物がごとごとく毎回外れてしまうのだ。只でさえ注目を集めていたカッコマンの戦績にだんだんとギャラリーから苦笑が沸きあがってきて、キザな彼も動揺している様子だ。

最初のうちは一気に負けを取り返そうと多めの金額を張ったりして奮闘していた彼も、とうとう最初に取り出した数百元のお金が尽きようとしたところで、突然今日はツキが無いと諦めたのか、急にアタフタとわざとらしく時計を見たり、あたりを見回して「あ！予定を忘れてた！」といった様子を取り繕うと慌てた風を装って小走りに博打の輪から離れていった。変に気取って現われただけに、そんな様子が余計に滑稽で輪の中からは笑い声が起こる。カッコマンは形無しだ。

街頭博打の様子は面白くて見飽きなかったが、そろそろ夕暮れが近づいていた。キリが無いのでカッコマンの退場と共に私もその場を後にすると、適当な店に入って食事を注文した。一人旅の身の上では覚悟の上の事ながら、やはり一人でボソボソと食べる夕食は侘しいものだ。昨夜はリー・ルー・ハイと一緒に楽しかったのにな・・・ちよっぴり稲城を恋しく想いながら食事していると後から店に入ってきて私のテーブルに相席で座った労働者風の三人組の男が話しかけてきて、自分たちの注文したおかずも一緒に食べるようにと勧めてくれた。

話を聞いてみると彼等は漢民族でトラックの運転のような仕事をしているのだそうだ。おかずも嬉しかったが、寂しい夕食時の話し相手が出来た事がもっと嬉しく、理塘第一日目もどうにか楽しく締めくくる事ができた。やっぱり一人旅の醍醐味はこんなさりげない土地の人との触れ合いの中にあるのだ。

(次号に続く)

【'わんりい' 活動報告】 張紹成オリジナル新・気功体操 / 体験講座

2010年11月12日(金) 於：鶴川市民センター・第二会議室

今回の講師・張紹成さんは、会が活動を開始した当初から5年近く、鶴川第二小学校体育館の開放時間を使用した「気功・太極拳講座」の講師を務めてくださいました。

中国国立戯曲学院大学卒業の、京劇の花形の役どころ武生(立ち回り役)俳優でもある講師の太極拳の動きは、まるで舞のように美しく当時の受講生を魅了しました。もう一度、張先生の指導で、太極拳をやりたいと願う声もあり、お願いしたところ、太極拳より平易で、狭い場所でもでき、日常生活に取り入れて欲しい新気功体操を編み出し、効果を挙げているとのことで、体験の運びになりました。

太極拳の手の動きと足の運びを取り入れた緩やかな体の動きに、'気'の概念と気功の呼吸法を加えたエクササイズは、1時間も続けているうちに体がぽかぽかと温まり、まるで温泉入浴をしているような心地よさでした。又、太極拳同様、緩やかに足を運びながらも片足立ちの訓練になっていて、知らず知らず下半身の筋力トレーニングにもなっています。



本来なら気功の'気'を一層実感する為の、更なる訓練も必要で、是非、継続したいとの声も聞かれましたが、昨今はエクササイズ会場を継続して押さえる難しさがあり残念です。市が、市民の健康のために、ご当地体操のような形で広めて欲しいものです。

(報告：田井)

真の幸せとは 劉^{せいさ}婧莎(国士舘大学・21世紀学部3年)

私達はたぶん命について考えることはあまりないと思いますが、いったん命が脅かされると、はっとして人間にとって命が、いかに大切なものであるかということに気がつくでしょう。実は、私は幸せを感じやすい人です。学校で試験にずば抜けた成績でパスした時、スケジュールによって今日の宿題を全部できた時、そんな時、私は幸せを感じます。家で自由に遊べた時、美味しい食べ物をいっぱい食べた時、私はとても幸せです。以前の私はそう思いました。しかし、今の私の目から見るとそれはとんでもないことです。私は、今こうして生きていることにとても感謝しています。そして、十分幸せを感じています。それは周りに両親や友達、先生など、自分を支え、愛してくれて、一人の人間として大切にしてくれる人たちが沢山いるからです。

私のおじいさんは長年心臓病とか糖尿病とか沢山の病気になるしました。でもおじいさんはずっと一生懸命に治療を受けたり、ちゃんと薬を飲んだりして家族の私達と一緒に幸せに生活していました。「おじいさんは私たちから離れて行かないよ!」と無邪気な私はずっとそう思っていました。しかし、去年の清明節に、おじいさんが突然天国に行ったという話を聞いたとたんに、私は頭がふらふらして心も取られたような気がしていました。家族と永遠に離れたような感じがして、初めて私は母に電話しました。母の声を聞いたとたんに、私は「わー」と大声で泣き出しました。少し落ち着いた後、母が言いました。

「なかないでね、あなたのおじいさんは30年間も病気だったよ。この30年間で毎日注射を受けたり薬を飲んだりしていたのは本当に辛いことだよ。でも何で今までずっと頑張っているのか分かる?それは私達ももっと家族と一緒に暮している幸せを感じるためだよ!」と。

自分のことばかり考えたら、毎日の痛みと辛さで早く治

療をあきらめて、天国に行きたかったんでしょ。でも自分が長生きできれば、家族のみんながもっと幸せに生きられるよう、自分が何でも我慢したり傷つけたりしていたおじいさんの心が分かりました。

この前、ゴールデンウィークの休みには私は家に帰りました。そして両親と一緒におじいさんの家に行っておばあさんに会いました。今にも泣き出さんばかりの顔をして、目が赤くなったおばあさんの顔を見て私は悲しくてどうしても我慢できなくなって隣の部屋に行ってしまいました。大声でいっぱい泣き出しそうになった時、ふと壁にかかってある写真を見ました。それはおじいさんとおばあさんと並んで坐って撮った写真です。二人の顔を見て何かとても暖かくて幸せな感じがしました。その写真を見ているうちにまるで「お前の幸せな顔が一番好きだよ!」ともう一度おじいさんの声が聞こえたような気がしました。

生前、おじいさんが私に言った言葉があります。「人は死ぬ時が来るまで決して諦めないで、命を大切にしなければならぬんだよ!」と「うん、分かった」と私は何も考えず、返事をしたけど、少し時間が過ぎた今、その言葉にはとても深い意味があり、おじいさん自身苦しみの中で死を何回、意識し、それを打ち消すように自分に言い聞かせていたのではないかと感じています。

真の幸せとはいったいなんなのか?今涙にまみれた私はやっと分かりました。それは自分が生きている、そして、自分にとって大切な人、自分が深く愛している人が幸せに生きるということではないでしょうか。

今私は生きていておじいさんの生き方にとっても感動しています。素晴らしい家族と天国にいるおじいさんが守ってくれて、そして、沢山の人が支えてくれること、これらを心の中に刻んで、これからも、前向きに生きて行きたいと思います。(原文のまま)

美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている!!

 2011'わんりい'新年会へようこそ 

於：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2011年1月30日(日) 11:00~14:00

- 定員：先着40名('わんりい'会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円(会場費、シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 新年会メニュー：①.ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談
②.ビンゴ ③.お笑い福引 ④.他
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100



ドキュメンタリー映画による国際理解講座

「地球のステージ～ありがとうの物語」(参加無料)

世界中で絶えることのない紛争や貧困。精神科医・桑山紀彦氏が映し出す明るく懸命に生きる子どもたちの姿。

2011年1月23日(日) 14:00～16:00

会場：町田市民フォーラム3Fホール
(定員：180名 申し込み順)

主催：(財)町田市国際交流センター

申込方法など詳細問合せ：(財)町田国際交流センター

☎047-722-4260(日曜・祭日を除く9:00～)

懇談会・『キューポラのある街の国際化』

川口市の国際化の現状と課題(参加無料/定員40名)

▲かわぐち市民パートナーズステーション前所長：鷲巣敏行氏

▲同国際交流員：晏晴氏

▲NPO法人国際交流クラブ理事長：渡辺 誠司氏

2010年12月12日(日) 14:00～16:00

会場：町田市民フォーラム4F講習室

主催：(財)町田市国際交流センター

申込方法など詳細問合せ：(財)町田国際交流センター

☎047-722-4260(日曜・祭日を除く9:00～)

モンゴル・ツアガンサル(旧正月)
(チャリティコンサート)

馬頭琴奏者のA.バトオチルはモンゴル・アジアの民族楽器を伝承する為、「民族楽器歴史博物館」建設のチャリティコンサートを各地で行っています。



2011年1月28日(金) 18:45開演(開場：18:15)

▲会場：文京シビックホール・小ホール(全席自由席)

〒112-0003 文京区春日1-16-21

丸ノ内線&南北線：後楽園駅下車/三田線&大江戸線：春日駅下車、各々徒歩3分/JR総武線 水道橋駅下車10分

▲参加費：大人3000円(前売2500円)/子ども1000円

▲出演：アララズ・バトオチル(馬頭琴)、バダム・ポロルマー(揚琴)、
バータルジャヴ・ポルドーエルデネ(ホーミー)、エルデネ
バータル・ジャヴハー(舞踊)

▲問合せ：☎03-5934-4689(横田幸子)

☎04-2942-2018(光井紀子)

主催：ツアガンサルチャリティコンサート実行委員会

驚異のコラボ!!

森麻季(ソプラノ)、崔宗順(バス)、崔宗宝(バリトン)

♪♪♪ 世界名曲の贅沢競演 ♪♪♪

演奏曲目：三大アヴェ・マリア/ラルゴ/献呈/マンマ/
メリーウィドウ・ワルツ/愛しい父よ

＊司会：青島広志 ＊ピアノ：新居由佳梨

● 2010年12月12日(日) 15:00開演

● 会場：海老名市文化会館・大ホール

〒243-0434 海老名市上郷476-2

小田急線・相鉄線「海老名駅」西口徒歩5分

JR相模線「海老名駅」東口徒歩5分

▲指定席：4,000円 ▲自由席：3,000円

● 主催：崔宗宝音楽事務所

● チケット：崔宗宝音楽事務所 ☎046-235-2716

東京中国文化センターの催し

◆ 理解・友誼・平和—池田大作と中国展◆

2010年11月20日(土)～12月12日(日)(月曜休館)

10:30～17:30(最終日は15:00閉館) ＊入場料：無料

於：東京中国文化センター

(港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F)

＊交通案内：日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分/
銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩約7分

中国人民は、池田大作氏を「老朋友(古くて親しい友人)」と呼びます。1960～70年代、中日友好の夜明けに、多くの日本の人士が困難な状況下、両国の関係改善に尽力しましたが、池田氏もその代表的な一人です。

1968年、池田氏は「中日国交正常化提言」を発表し、世論を喚起し、国交回復と平和友好条約締結への道筋をつくりました。

池田氏が推進した民衆間の文化・教育交流の幅の広い事業は特筆に値します。互いに理解し合い、友誼を結び、ともに手を携え平和を目指す——中日人民の心と心に“金の橋”を築いた池田氏の軌跡を、ここに紹介します。

＊主催：東京中国文化センター、中国日本友好協会

後援：中華人民共和国駐日本国大使館他 協力：創価学会

＊問合せ：☎03-6402-8168(中国文化センター)

E-Mail: ccctok@hotmail.com

まだ、間に合います!

せんし
中国剪紙(切り紙)展

中国剪紙(切り紙)展

平成22年10/17(日)～12/19(日)

黄河流域に広がる黄土高原の地で親から子へと伝えられてきた剪紙には、この厳しい大地に住む人々の願いと祈りが込められています。(わんりい10月号8～10ページ、丹羽朋子さんの文章を参照下さい)



2010年10月17日(日)～

12月19日(日)まで

9:00～17:00(休館日：火曜及び祝日の翌々日)

一般350円/小中学生及び65歳以上無料

於：埼玉県山西省友好記念館・神怡館

〒368-0201 埼玉県秩父郡小鹿野町両神薄2245

http://www18.ocn.ne.jp/~ogano/shenyi.html

【剪紙提供】日中文化交流市民サークル「わんりい」と上河内美和(剪紙作家) 【映像提供】丹羽朋子(東京大学大学院文化人類学研究室博士課程) 【主催】(財)小鹿野町振興公社
【問合せ】神怡館 ☎0494-79-1493 / FAX0494-79-1489

【12月の定例会と新年号のおたより発送予定日】 共に田井宅です。どなたでもご参加下さい。

◆ 定例会：12月10日(金)13:30～

◆ 新年月号おたより発送：12月29日(水)13:30～